

真 生

第 四 卷 第 二 十 號

▲誰でも静かに人生の行く先を眺むれば必ず一度は來なければならぬ一つの重大な問題がある。而て夫れは即ち人生最後の死そのものである。

▲世には重大な事件も数多いことであるが凡そ死と云ふものは重大な問題として自分死の寸前まであるまい。それ他人の死なればともかく乍ら然かゝる重大な問題よりも更に重大問題として私共に残された問題は人類生活の理想の問題である。死に對する不死の問題も吾人の理想の一部には相違ないが、茲では人生の價値的生活そのものである。一部には相違ないが、茲では人生の價値的生

▲眞實に生きることは單なる肉的生命の生存を云ふのではない。そこには生きるに云ふ以上は價値的行動の上に眞に生きることを云ふことがなくてはならぬ。生きることは即ち價値に生きるの謂である。

▲如來に救はれると云ふことはたゞ安心して一切を如來に任せることのみがそれであると思ふならば夫れは大なる誤りである。否むしろそれならば夫はたゞ一時の安價な氣休めに外ならぬ。

▲從つて眞實の人生には何等のかゝりもないことになる。更に一步の價値的行動は其の上に現はれて來なくてはならぬ。死の自覺は一時で済む。而て永生の自覺は價値の生命としての永生であらねばならぬ。

▲永生の自覺とは價値の上にも永生であり、壽命の上にも不死の生活であるのである。然らば吾等は如何に生くべきか、之こそ私共の眞に反省すべき重大な問題である。

▲いつも限りなき向上の一路として、如來を中心とした眞實の生活それこそ眞に永生の道ではないか。(念)

目次

●無限生中一點無限	尅子
●眞に生きるには	土屋觀道
●危険思想に就て	
●宗教思想と社會主義問題	土屋觀道
●大阪光明會別時	尙
●眞生同盟の讃頌	佐藤忠義
●得生寺	曙光

●私たちが光の前に出ると黒い影法師がついてゐる、
 ぞう影法師を消さうとしても消す事が出来ぬ、私の動
 く通りに後で動く、私は此影法師が恐ろしいものゝや
 うになつて來ました。
 ●そのやうに此頃は日中でも誰の上にも皆此影法師が
 伴いてゐるやうに見えて來た。その人から發散する垢と
 臭氣とが黒く凝結してその人を包んでゐるやうに見え
 てならぬ。皆な大きな黒坊を背負つてゐるが、それが
 眼に見えぬから平氣で容子振てゐるが、實は怖ろしい
 事だ。自分から湧いた黒雲に自分が蔽はれて先が見え
 ず、苦んだり恨んだり藻掻いてゐる、淺ましい事だ何
 の事はない自分で目隠して困つてゐる猫と同一だ。
 此の暗此の臭は業執、人間苦である、此の邪魔氣を破
 るのは内から躍り出る魂の力と、外から温ため透解す
 る如來の慈光とより外ない。此の内より加はる力に
 因つて、陽出て、退散する朝霧の如く黒法師が消散し
 て初めて晴々した生如來が現する。
 ●念佛とはこの元通りの晴々した姿になるといふ事だ
 ある。ペールを被て居らぬ人間、野糞に新聞紙を被せ
 たやうな家庭や、社會でないといふことが「如來現」で
 ある。
 ●佛の像に光背を戴いて、光被十方を射、スツクと立
 ち上つてゐられる様は現代に與ふる強い暗示である。
 (尅子)

無限一點中生無限

◎極樂の外まだ何處かへ行く處があると思つてゐるから困る。
 ◎亡つても墮ちても極樂で、極樂の外へ一步もはみ出る事は出来ぬ。
 ◎が、此處が極樂だと承知してゐても、實は此處が極樂やら極樂でないやら解らぬ、又
 は是れから極樂へ行きのやら行かぬのやら、極樂と云ふ處があるのやら無いのやらそれも解ら
 ぬ。
 ◎極樂と思つてゐるのも計らひで、何處が何處やら、何處から出て何處まで行くのやら薩
 張り解らぬ。
 ◎わからぬ中にも解つてゐる唯た一つは、わからぬ處からわからぬ處へ移る道中に今自分
 がゐるといふことだけは瞭つきりしてゐる。
 ◎私はいつも自分の姿を想ふ大密雲の中を飛んでゐる飛行機のやうに。進んで來た後も雲
 なら前も雲、上も雲なら下も雲、右も左も四方八方雲又雲、墮ちても騰つても雲なら飛んで
 ゐる處も雲、どれ丈け行つたら此雲から出るのだやら、たい漠々、たい洋々、雲から出て
 雲に入るだけ、自分が走つてゐる、かと疑はれるがよく氣をつけて見ると矢張り走つてゐる、
 落ちて行くやうに飛んでゐる、けれど何れだけ行つても變らぬ、雲の海雲の世界、不測の世
 界、無窮の世界、不知の世界、無限の世界、何も掴かませぬ一大克明の世界、たい平衡を
 失せず素晴らしい勢で進んでゐる『自己』だけが判然り解つてゐるだけである。
 ◎此有様を自知する時なんとも云へぬ大きな氣になる。何一つ頼りにならぬ中に總てが頼
 りになつてゐる、無限から無限へ亘る旅、而かも無限が私となつて下さる、佛だとか神
 だとか、凡夫だとか菩薩だとか、地獄だとか極樂だとか、ゴタ／＼した『名』は一つも見
 えぬ、そしてたい一色の世界雲ばかり、佛ばかり、光明ばかり、地獄ばかり。地獄を極樂
 に換へなくとも地獄ばかりで安住してゆける世界である。一切を喰て、一切を辨じ、一切
 を取捨して一切を己としてゆける世界である。(尅子)

眞に生きるには

土 屋 觀 道

昔から今日に至る多くの歴史を見るに偉大なる人物は皆生存中に大なる仕事を成した人である。而もそれは必ずしも此の世に限つた事業ばかりではない、例へば其の人の死後に於て初めて社會に大なる影響を與へた人と雖も其のなした時代は一として此の實現になされないものではない。而て誰か死んでから此の世に仕事をなし得たものが一人でもあらうか、それは決してあり得ないことでもあり、又昔から一人として有り得た人ではない。

然に世間の多くを見るに誰人も生を愛し、又向上を自らに願はぬ人ではないものを何が故に自ら眞に生存の工夫をなし、又眞によく向上の方法を自らに構する人の甚だ少いことであらうか。たまたま此のことを構する人があるとしても、それは十中の八九恐らくは眞に爲す可きの大道を忘れてゐる有様である。

人は此の世に生きる爲めには食ふこともせなければならぬ、乍然食ふ爲めの人生とはどうしても思はれない。其の食ふ事は要するに私共の此の世に於ける生存を維持する爲めの糧としか思はれない。然にともすれば私共の人生には此の判りきつた一つの問題が多くは主客轉倒して、反つて一生を食ふ爲めの生活にされてゐる形ではないか。之を内にしては肉慾性慾の奴隷となり、之を外にしては金錢と名譽と置位とに自己を没頭してゐるのである。

乍然少くとも少しく考へある人々は自らに人生の一生を深く反省すべきでないか。人の一生は永劫にこのまゝで續くものではなく、いつかは必ず死そのものに遭遇せねばならぬものである。而もいつまでも永い間の後ではない、時によれば今にも知れぬ人生である。而て如何にそれが遅くともそれは必ず百年を出でぬであらう。否若し私共にして靜に人生の一生を考察すれば今自分が生きて來た今日までの年月に之から幾年を加へたら此の地球の土に歸るかは殆んど目前の事である。

私はもうすぐ四十の歳となる、そして其の間過ぎし二十年の如何に速かつた事であらう。思ふて見るさへ實に夢のやうに速かつた。而も其の間に私は何をどれだけ爲したであらう。實に自ら爲すべきことの少なかつたことを思ふ時今後の一生に於て、吾果して何ごとを爲しうであらうか。此の過ぎた昔を思ふなら、其後の二十年はおろか生れてからの四十年でさへ、思へば夢の一日である。而も此の分て來る可き一生がやつて來るならばこゝ十年や二十年はたゞ一瞬の間であらう。去年も徒に暮れたが、今年ももうこゝ數日で終らうとしてゐるではないか。

一面から見れば人生は實にまたなき幸福であり、靜に眺むれば其の一生は一として之を充分に反省すれば皆悉く自己のまたなき經驗であり、そこには捨て難い人生の向上を意味していないものではない。乍然、然ばそれは再び繰り返し、又永劫に之を繰り返してまでも行きたいほどの過去の生活がどこにあらうか。恐くはそこには何ものとして眞に再びするべきものではないのであらう。而も實際はともすればせなくてもすむやうな、否なかれかしと思ふことさへ毎日草忙として繰返へされてゐるではないか。私たちはこんなことで到底永劫に満足し得べきものではない。

然は今後の人生を如何生きるのが私共の望みであり、そして又それが人生としての眞の生き身である

であらうか、それは偏へにたい真剣に自己の是なりと信する本心の命するまゝに最高至善の生活へと直進する事でないか。眞に生きるとは眞實に生きる謂に外ならぬ。徒なる感情の上に左右せられるの生活でもなく、さればとて盲目的に動く云ふばかりの生活でもない、況んや情意の調和もつかぬ單なる理智主義ではもとよりない。それは私共の心の上に智情意の本源として生き生ける人類本然の自由生活である。

そこには肉慾の爲めの人生にあらず、人生の爲めの肉慾であり、性慾の爲めの人生にあらずして、人生の爲めの性慾であるが如く、經濟も道德も名譽も地位もそれは悉く人類生活の向上發展を中心とした人生の糧である。糧は生命をつなぐ爲めには必要であるが、糧そのものが人類の生命では絶對にない。さればと云つて之等の總てを悉く無視して何等の價值もないと云ふものではない。乍然同じ價值と云ふてもそれに價值の程度がある。即ち價值には價值そのものとしての生命の如きものと、其の生命をして價值あらしむる爲めの効用價值の如きものである。前者は生命の價值として人生そのものが向上の人生として意義があり、後者は此の向上を助くる意味に於ての補助價值である。されば私共が此の肉慾、性慾、財性其の他經濟道德、名譽、地位の如きものに對する觀念は要するに之等人生の直義を價實する意味に於ての補助價值であつて、是等のもののそのものが獨立的に價值あるものではない。従つて之等の價值は此の人生の向上を助ける上に於てのみ初めて人生の上に必要價值を持つものであつて、それがどこまでも永久に生命よりも尊いと云ふやうな價值を持つものではない。否そればかりでなく、若し是等のものによつてそれが人生の向上を助け、人類の文化を危くするほどのものとなるならばそれは價值どころか寧ろ無價值有害のものとして吾人の生活から之を厭離せなければならぬものである。たとへば食物は人類の生活上少くとも無くてはならぬものである。そして其の意味に於て食物は人生に必要であり、又それだけ價值あるものである。乍然第一其の食物の爲めに其の度を過して返つて病氣を起し、或はそ

れの爲めに死を招くと云ふほどに用い過ぎたならば、それは反つて人生に害をなすものとして少くとも害を爲さぬ程には之を退けねばならぬと同じやうなものである。

然に靜に人生の一生を反省するに多くの人々の一生の生活に於て果してよく幾人が此の直義を判別して此の肉慾と性慾と財慾と道德經濟等の問題を眞に意義あらしむるものがあるであらう。ともすれば多くは食い過ぎて胃腸を病んである人の多いやうに、幾多之等の肉慾と性慾との爲めに身を亡し、或は財慾とか名譽とかに捕はれて反つて人生の向上を妨げられてゐる人々が多いではないか。

こんな事柄は靜に自己の生活を反省すれば實に判りきつたやうな事柄ではあるが、さて實際日常の吾等是如何と見るに其の生活の事實は反つて之を裏切るもののみの生活である。

乍然私共の理想は今や此の事實を以てのみ其の他に生活することにあきたらずして、むしろ之等の一切生活をして、眞に自分の是なりと信する理想の生活へと進ましめねば止まぬものがある。而して其の理想とは何であるか、一切のこと皆現實を離れて何者もないが、乍然此の現實は單なる一時の現實にしらずして、どこまでも永劫を貫く人生の理想實現の力ある現實の生活である。換言すれば此の今日一日をして、人類生活の理想實現の一日たらしむることである。それについて、ものは一つの考へ方によつて其の生活の實現の上も又色々の方式をなして現はれて来るものであるが、今や私共の生活は罪に過ぎたる昔のことの追憶にのみ人生を送るべきものでなく、又單なる一種の未來にのみ此の人世を送るものでなく、之等の一切を悉く此の現實の上に意義あらしむる現實の生活であらねばならぬ。

思へば今年も己にあと數日をのこすのみとなつた。さうして又新なる一つの歳を迎えられやうとしてゐるが、我等は如何に生く可きか、一度去つて再び歸らぬ今日の人生でないか。友よ私の心からなる眞生の友よ、今や私共生活は正に來る可き成佛國土の理想實現の生活へと此の全身を献ぐるこそ即ち眞生の道ではないか。(一四、一二、一〇)

危険思想に就て

(宗教思想と社會主義問題) 三

土 屋 觀 道

「様、私はこゝに於て私共が常に考へねばならぬことは單なる世間の惡評や善評を輕々に信することです、而も私達の常として人の善事やよい評判は中々に信じませんし、又さう永らくも其の人の事を善人として覺えてもゐませんが、一度でも其の人の惡事や或は惡い評判でも聞くなれば直に之を信じやうとすることです。此の事は實に人のことばかりでなく、どういふものか私自身にも深く此のあさましき傾向を持つてゐるのでありますが、乍然今となつて考へますれば此のことはよほど深き注意を以て此の事實の真相をきかめた上からでないで、とんでもない一生の失敗を來たすものであります。従つて私共の社會生活の上にをきまして又此の傾向の更に大なるものゝあることを知らねばなりません。さうして、殊にそれが社會思想の變遷期に於て、或は哲學に、道德に、すべてが一大轉換せらるべき時に於て其の甚しいのを感じるのであります。茲に於て私共は只徒に危険思想とか過激思想といふものゝ名前を恐れてゐることを止めて、どんな思想が果して危険思想であり、又過激思想であるかを其の實質に於て正しく之を判明すべきであります。而も眞に社會生活の上に又人類文化の進展の上に危険な思想であるならばよろしく之を衆人と共に之に觸るゝことなからしめ、又眞にそれが社會進歩の爲めに、或は人類生活の幸福の爲めにならないほどの急激なものであるならば其の社會施設の上に過激ならしめないやうにするといふことは最も思慮ある人々の考へとして當然なすべきことであらねばなりません。」

乍然之と同時に、否之にも劣らないほどに、否それにも増して此の世の社會には時代の進歩に反對して、人類の文化を妨げ、社會の幸福を人をも知らず自らにも知らないでやつてゐるといふやうなものはないでありませんか。否ともすれば自らも是とし、人からも眞なりとせられてゐたものが其の時と處との變るに従つて反つて社會の進歩を害し、人類の發展を妨げるやうなものがあることに氣付く時、今日の私共はそこに充分の深き反省を要するものであるのであります。

それは何であるかと申しますれば、如何なる思想と道德とが眞に人類の發展を意味し、社會の幸福を來すものかといふことであります。さうして從來の善とせられました道德的行爲、若は惡とせられました不道德的行爲、或は其の思想に於て今も尙それはそのまゝにして置いて善であり惡であるであらうか言かへれば昔のまゝの道德的思想行爲が今も尙今日の社會生活に於て道德的思想若は行爲として善であらうかどうか、例へば極端な例ではありますけれども、昔は親の仇を討つといふことは最もよいことゝした時代があつた爲めに、今ではそれをよいことゝはしないやうになつた如き、少くとも或る時代には之を善とのみした時代もあり、或は時代は善とする人もあり惡とする人もあつて、遂には全々善とするものが無くなり、反つて惡とするものゝみとなつて來た如き之であります。而も道德的表面には親の仇を討つが如きは惡いとしながらも之を討つた人のあつた時に人の情としてはさもあるべきであるとして關に賞揚した傾きのあつた如き。又一概に子は親に従ふのを以て道とするといふが如き思想は今も尙は之を是として多くが見てゐるといふやうであるが、親の云ふ所が必ずしも社會の爲め國家の爲めになる

ものとはかりも定まらず時としては其の親の言行が之等のものと相反する場合、それでも其の子は尙之を知り乍ら其の親の言ふ所に従ふのが道であらうかと考ふれば、之をしも尙親に従ふを以つて道なりとのみいふ人はないであらませう。従つて此の間の社會生活に於ける社會思想の變遷を私共はどうして知ることができるであらませう。

凡そ私共が此の土に生活する限り、自分が此の土に於て平和なる幸福を送り度いと云ふことを心から望まない人はないでせう。而てそこには一切の束縛も不安もない眞の自由と平和との世界を望むことであらませう。若しかゝる私共の平和と幸福が得られない場合、私共は何とかして之を得やうとするのではあるまいか。さうして之を妨げるものがある場合、之を退けやうとして、そこにあらゆる術策が構せられるのであらませう。而て又さうすることを誰が悪いと考へませうか、そして自分はそれをしてよいが他の人はそれをしてはいけぬと誰がほんどうに考へ得られませう。そしてそこには自分の生活の安定を計り、天地の道理を研究し、或は感情の融和を中心として眞の喜びを獲得しやうとすることを、どうしても悪いことだと考へられないのが本來私共の自然の姿ではありますまいか。

然に此の世の實際は如何でせう、果してかゝる意味に於て私共は自分の立場を明にし、又人の立場を明にして眞に生きやうとしてゐるのであらませうか。そして又今日の社會及び社會道徳なるものが眞に社會の進歩人類の發展、幸福の資とするに相當する充分の正しいものとして、世間のすべては之を承知し又之を實行してゐるものであらませうか。靜に思へば自らに是とするものが他の人には否とせられ、他の人には是とせられるものが自分の上には非とせられたり、或は表面上には一般的には是とせられな

がら自分の心の奥そこには人にかくして之を犯す方が都合はよい位に考へられてゐるものがありますまいか。又更に一層深く考へてまゐりますれば自分も許し人も亦許してゐたやうな多くの考へは行ひが社會の進歩、人類の發達の爲めに今日ではもう變えねばならぬと云ふやうなものが今尙残つてゐるものではないか、そして又、昔はしてはならぬと云ふやうなものが今尙残つてゐるものではないか。今日では反つてやつてもよい、否やらねばならぬといふやうなものになつてゐるやうなものはないでせうか。さうして眞にさうすることが社會の進歩に功驗し或は人類の幸福を計るものであり、亦其他共にそれの方が本心から望ましいことであるといふやうなものがあればしまいか、私は少くとも今日の社會に於てかうした意味での私共の考へを一々人類の進歩社會生活の向上の爲めにいと深く考へ直さねばならないではないかと考へてゐるものの一人であります。

さうして私の所謂危険思想なるものはかうした社會の進歩を計ることを知らない思想や、或は反つて之等の事實に反對した考への持主、それらを總じて危険思想若は危険思想家と思ふのであります。然に世間の實際は人も知らず自らも知らずしてかゝる危険思想家が如何にも反つて健實なる思想の持主のやうに自ら思い世の人々も思つて來たかと思はるゝ點の甚だ多くある事を私は如何にも面白い世の中だと想ふことが度々であります。

丁様、私はかくいふからとて直に私をして社會主義に共鳴してゐるものだとは思つて下さいませう、それと共に世界のすべてが前に言つたやうな舊道徳の持主であるといふのでもありません。

乍然世の中には右のやうな舊き思想の自ら偽善と知つて之を行ひ自ら惡と知つて惡を行する人も甚だ多いかに見られます。従つて自分の徳を徳としない、働かずして金が慾しいやうなたくらみのみを構する人さへ皆無ではありません。さうしてかゝる人に限つて少しでも自らよいと思つたことを仕やうもの

なら、それこそ天下第一人のやうな内心の氣とををする人の甚だ多いのに寧ろあはれを感じるものであります。乍然打あけた所、かゝる心は人のことばかりではない、現にともすれば私共自身の心の中にも奥深くひそんでゐることを知るものでありますから、あまりに人のことばかりは申されません。乍然、もう私は少くともそれを以てよいとはせられなくなりました。さうして自分も人もともにかゝる誤まつた考へから一刻も早く超脱して、少くともできる丈つゝなりとも應分の努力と修養とによつて、かゝる誤まつた考へへとそれから出てくる行爲とを打破つて、自分の本心から流れ出づる至幸の生活へと至る類が進むやう愛の心を以て立たねばならぬ深く心を定めてゐる次第であります。

然にT様、私共は永い間社會の進歩の過程に於て色々の境遇を経て來ました爲めに、今ではもう必要でない、否必要どころか反つて害にさへなると思はれる思想や行爲が昔からなる古い社會の壓迫や習慣によつて、中々抜け去らないで底深く心の奥に染みこんでゐるものがあるのです。さうして一寸見ればそれが反つて私共の本心の要求かの如く人にも自分にも考へられてはんだうの自己そのものがそれによつて如何に損けられてゐるかをさへ知らないでゐることが多々であります。否恐らくは世の多くの人々は單なる五尺にも足らない、さうして僅かに五十年か百年も此の土に存在することの出来ない肉體を以て如何にもそれが自分でもあるかの如くさへ思込んで、未だ眞實の自分が一體何であるのやらさへ知らない人が多いのであります。そして反つてそれらの爲めにはんと自分の發展を害し、さうしてほんどうの自分の樂しみを永久に受けることの出来ない哀れな人々のみが此の土に多いことを見るのであります。世に悲惨といふ悲惨の中に一生かゝる誤まつた生活の中に眞の慰安も發展も得られずして而も永劫に此の迷界より脱することの出来ない人はぞ哀れなものとてはありますまい。

(大正十三、八、一六、午後於御殿場大乗寺)

大阪光明會別時 (荷)

待ちに待つた秋季特別修養別時會が愈去る十月三十一日天長節の吉辰より、十一月六日に亘る一週間南河内郡石川村大ヶ塚の得生寺國寶大佛前で開催された、予は少々風邪の氣味で引籠つて居たので二日の夕刻に漸く登山参加する事が出来た、阿部野橋の大鐵終點で計らずK、Iの兩婦人と態々東京から遙々やつて來られた宗大生N君とに落ち合つたので行を共にした、阿部野を出たのが午後五時、太子口に着いたのが五時五十分丁度乗合自動車が驛前に居つたので一行は途中迄自動車で運んで貰つた、雪闇の途は星の光りで危なげに進む事が出来たが大ヶ塚に來た頃から途が大分明るくなつて來た、村で提灯を借りて融通派の大念寺の前を右折して少し行くと急阪がある折柄煌々たる月は正に行手の山の端を出でんとして居る、一行は思はず「あ、お月様が」と叫んだ、何たる清淨な御姿よ、暫時立ち止つて月に向つて合掌すると

念佛が無意識にほとばしり出たのであつた、月光を浴びつゝ阪を下つた、行手は小河を距て、つま先上りになつて居る、山田の中を三丁計登ると途は松の林に入つて行く、途上に投げられた黒い松の影を履みながら一二丁行くと燈が見えた木魚も微かに聞えて來た、靜寂は木魚によつて一層深刻に味はれるのであつた、やがて得生寺の門前に來た、定紋の幕が張られてゐる、勇ましい木魚の響に身も心も浮き立ち宛がら夢の中を行く様な心地で庫裡に着いた、一行は用意の木魚を出して本堂へと急いだ、丈六坐像の彌陀尊像は光顔巍巍として靈光は予の身心を照らし神秘な情操は正に尋常ではない、此の道場にて此の氣分の下に別時勤修の幸こそ宿福萌すところと歡喜の涙を催すのであつた、やがて木魚は止んだ、土屋上人のお十念が濟むと會衆は上人を先頭に徐ろに合掌念佛しながら本堂を下つた、時に午後七時引續いて坐談會が開始された、會衆は打ちくつろいだ上人を前にして最も家庭的に不遠慮に坐談を交へるのであつた、上人は會衆の質疑に對して最も親切に且つ熱

必に時を忘れて話された上人の質問に對し土屋上人は發願回向の義は如來に心からお縋りする歸命の中に籠るのであつて、どうぞ如來よとお縋りするところに三心が具足するのでお縋りすることが直ちに願であり行であつてお縋りすることゝ行とを別に扱ふべきではない、世には自分の唱へた念佛を銀行に貯金をする様に思つて其の唱へた念佛の功德を平等一切に振りまくと云つた風に思つて居るものがあるが之はどんな間違ひで如來にお縋りする心の欠けた念佛は彌陀の本願ではないと咎へられたことは實に啓蒙の一針で難有く感ぜられたのであつた、やがて午後九時になつた、別時の制規は嚴守されて閉會が宣せられた、會衆は思ひ／＼に夜具を座敷に運んだ、二三十分後には既に誰かの鼾聲が座敷の隅で聞えるのであつた。

靜寂を破る力なき晩秋の蟲の聲は更くるにつれて却つて靜寂を加へる感がした、眠るでもなく、眠らぬでもなく、うとうと一夜をあかした、梵鐘は靜かに起床を促がした時に午前四時半、月はさえて境内は眞晝の様である、併し日出迄にはま

だ大部時間がある、座敷は間もなく整頓された、洗面を済した、會衆は座敷へ戻つて立ちながら一列に並んで長方形を作り合掌念佛して上人を待つのであつた、やがて午前五時になつた、上人も座敷に見えた、會衆も揃つたかいしやくを待つた上人は懇懇に上人に一禮して靜かにかいしやくを打ちながら先頭に進み上人之に次ぎ會衆は其の後ろい就いて最も靜かに入堂するのであつた、禮拜儀が朗らかに合唱された、やがて念佛三昧に入つた、拂曉の念佛は實にひし／＼と如來の靈力に引立てらるゝ思ひがして譬へ様のない尊い感がした午前七時退堂、朝食を済して一服の間に境内を出て南手の山に登つた、此所は河南の平野を一陣に集むる絶景の地に背面に金剛、葛城の峻峯を控へ遠く雲煙の間に攝津の平野を望む事が出来て如何にも大自然の懷ろに抱かるゝ思ひがして法身佛のかくも雄大なる御姿に恍惚として合掌念佛をする計りであつた、梵鐘は午前八時を告げた會衆は再び座敷に列んで上人を待ち徐ろに入堂した、二ダ時計り念佛すると上人の法話がしまつた、言々句

々實に深く肺腑をつく思ひがした、午前十一時三十分退堂晝食を済して少憩午後一時入堂同三時から上人の法話があつた、午後四時半退堂で夕食を済し入浴をして午後六時半に又入堂約三十分念佛して座談會に移つた、別時中一日の行事はざつとこんな事であつたが道場の位置と云ひ道場と云ひ本尊と云ひ將た指導者と云ひ申分のない今回の別時會は正に空前の成功をかち得た譯で結衆が非常な歡びと力と望みとを持つて勇ましく山を下る事が出来たのは何よりの成功を證する事と思ふのである、殊に得生寺上人が非常な歡びの中に定期別時の道場として同山の提供を快諾された事は吾等同志の衷心より感謝の意を表するところであつて道の爲に如斯修養會が永久に存續されん事を希ふて止まない次第である終りに今回の別時會結衆の芳名を紀念の爲に左に紹介さして頂きます。

結衆芳名

土屋 觀道 上人
岸 信 宏 上人
溝 淵 昇 運

三 木 惠 教
神 谷 學 周
黒 野 智 山
松 井 戒 順
金 澤 高 運
藤 田 高 印
杉 本 壽 延
森 田 好 満
藤 村 米 子
黒 宮 平 八
桑 原 省 三
早 川 孝 祐
米 田 傳 司
會 我 尾 昌 治
藤 村 健 三
橋 本 政 一
大 山 政 子
弓 場 愛 子
市 岡 峻
城 戸 英 之 助

高田シマ 浅野 侯野 古家 野田 徳永 岩崎 高島 日暮 國松 造門 夫雄 郎男 一氏

飯塚龜太郎 豐田省三 同覺藏 鶴田たき 木成文子 稻山か子 中村康隆 堀江榮子 佐々木繁三郎

眞生同盟讃頌

佐藤忠義

一 無量無邊の大字宙、
人身を得て生れ來て、
如來の無上恩寵に、
無限に生くる聖衆よ。
いまこそ時は來りけり、

「眞生」の盟に團結し、
聖意を、この土に現はさむ。
二 宇宙に漲る大慈悲心、
我等の神氣に薫じてぞ、
こゝに我等は眞に生き、
聖意あらはす務めする。
いまこそ時は格りけり、
「眞生」の盟に團結し、

聖意を、この土に現はさむ。

三

眞に生くる人ありて、
すべてのものも生くるなり、
天地は歡喜し進歩して、
眞の平和は格るなり。
いまこそ時は格りけり、
「眞生」の盟に團結し、
聖意をこの土に現はさむ。

四

聖なる聖名を稱へては、
聖意を心に安置して、
偽惡醜の世の中を、
眞善美にぞ改造めむ。
いまこそ時は格りけり、
「眞生」の盟に團結し、
聖意を、この土に現はさむ。

五

生きたる信であるなれば、
必ず行ひ伴ひて、

艱難 迫害逼るとも、
悦び、うけて勵むなり。
いまこそ時は格りけり、
「眞生」の盟に團結し、
聖意を、この土に現はさむ。

六

光榮あらはす務めする、
眞に生くる聖衆を、
十方諸佛は護念して、
無上聖寵垂れたまふ。
いまこそ時は格りけり、
「眞生」の盟に團結し、
聖意をこの土に現はさむ。

—一四・二・二五—

〇とも角もあなた委かせの年の暮
一 茶
（焚くだけは風がもて來る落葉かな
良 寛

得生寺

曙 光

秋既にたけて。天高く氣澄み月さやかなる時、俗塵を遠く離れて深緑の松林に圍まれたる清淨の地得生寺に於て國寶大佛の御前に土屋上人御指導の下に勤修せられし一週間の御別時は、非常なる感激の内に六日其終りを告げた。私は過去に於てお別時毎に、自分の信仰並びに念佛に躍進的なる向上を感じ來つたが、此度程多大の進歩と感銘とを恵まれた事は未だ嘗てない。勿論一週間も引續いてお別時に隨喜し得たのは今度が始めてであるから、其爲であるかも知れないが、そればかりに因るとも考へられない。上人のいつもながらの法に對する忠實其の如き態度も今度は、一層其濃厚さを増した様に伺はれた、御稱名並に御講演の言々句々は一つとして吾々の靈の奥底迄徹せざるはなかつた、又私自身が多大の希望と固き決心とを以て此お別時に加つた事はもとよりであるが

他の同行の眞實さも又格別であつた、此人此所此時が相依り相助けて私に此大いなる効果を齎らせたものであらう。

御住職岸氏の謙讓にして眞摯なる態度には感心置く能はざると共に其細心なる御世話に對して感謝に絶えない、岸氏の人格たるや又偉大である。私の此お別時によつて與へられた感慨たるや實に深く且大である私は恐らく一生此お別時を忘れ得ないであらう、始めて上人のお導きを蒙つた時と此お別時とは我信仰生活史上特筆すべき二大事である。南無阿彌陀佛（二四、一一、九）

趙 子

先輩や知己、澤山のお朋だちの方へも心に懸けて居り乍無沙汰勝ちで困て居りました、そして此度私の生活録、感想録を自宅で印刷して手紙代りに月に二回三回づゝ發送することにいたしました。

道縁のある方々へもお願ひしたいと念ひます

左へハカキで御通知次第差上ります。

愛知縣津島町的場、中野内 一味會

吾 朋 便 り

一月廿七日 佐屋村 佐藤 忠義

南無阿彌陀佛合掌

秋風も身に沁む頃と相成ました、御養生專一に皆様の益御多祥を祈上ります。

河内の三昧會には叔父の家の佛事等にて參拜いたしませんでした、また今月は拜省の機も無く心淋しく存じます、去る廿二日より三日間の黒宮様の三昧會で熱心にお念佛申させていたしました、目下は舊新約全書を読んで居ります、曾て讀んだ事もありませんが、以後は香ひをかいたいけ、今は喰べて味が解りますやうになりました。獨樓閑園めぐまれし日月のもとに修養につとめて居ります。八聖道分々活社會に飛び出して心から働かせて頂く日も近づきつゝあります。

眞生同盟に就て、私の感想を別紙の如く述べさせていただきますました、具體的に實現の日を念じます其筋は未弟の一人に御加へを願ひます、まづは御

氣嫌御伺ひ申上ります。

南無阿彌陀佛合掌

南無阿彌陀佛

今回は御遠路御繰合せ下され御親切なる五日間の御講演誠に難有厚く御禮申上候、御陰様にて一般寺院宗侶を覺醒に御導き下され組内寺院の喜び此の上無之候、拙寺御滞在中は何の風情も無之失禮之事のみ多く何とも申譯け無之候御道中御無事御歸京の御事と推し候、御疲勞も一入の事角御法体御自愛までに遊ばされ度奉祈上候、明年四月十八日より五日間の洞泉寺御教化を御待申居り候、家族共よりも宣布と申出候先は御禮迄申上候、

合掌

十二月六日

安西 承 信

土屋御上人御坐主

御上人様不相變御無沙汰申上相濟ません御赦し下さいませ御蔭を以て兩人共慈光裡中無事に働かせ戴て居ります先日岐阜へ御越の筈にて當地新入信の方々と共に楽しく御待申て居りました處御都合

にて御中止之由承り誠に残念に存じました、然るに大
阪(得生寺)新年別時は御極りになりましたか又清水は
不相變八日に御催になりますか、御序に御一報御願申
上ます終に奥様へ宜敷。

大垣市 桑 原 省 三

土屋觀道上人様

御無沙汰致して居ります、眞生誌上にいつも先生の御
勤務を伺つて不斷の御精進を拜察申上げ居ります本
月御來山下さる事と喜んでお待ちして居りましたが御
變支との事承り誠に残念に存じます、何れ正月東上の
際は拜顔がかなへる事と其節を待つて居ります、先月
中で現役肅期となりまして余り苦しいと思ひ、
いて見習士官として服務する事になりました皆々様へ
よろしく御傳へ下いませ

岐阜歩兵第六十八聯隊

大 野 顯 道

土屋觀道様

私は永らく芝公園地土屋上人の隣で御世話になつ
ていましたが今回神田區江川町五番地へさうやな
工場を設けまして其方へ移轉をいたしましたから
さうぞ相不御引立御指導の程御願いたします

大蔵省御用達 神谷善之進

實相寺三昧會案内

△時、大正十四年一月三日より七日間
△所、静岡縣清水港實相寺内
(江尻驛より約十町)

△導師、土屋觀道上人

△會費、金壹圓、外に實費

△成べく毛布の用意ありたし

注意

今度の實相寺三昧會は例年に比し、特に
三日よりすることになりました。實相寺
上人は年末年始の大多忙のところ、吾々道
友の正月休みを利用の出来るやう、特に三
日からの休みにしていただくのです。願くは
友の御参加を願上ます。

道友有志一同

定價一部十錢 半年六十錢 一年一圓
振替口座東京四七二八八番 眞生社

編輯兼 土 屋 觀 道

發行所 眞 生 社

東京市芝區芝公園第十四號地九番

印刷人 三 井 清 次

東京市芝區三田四國町二番地三號

印刷所 玄々堂印刷所

(大正十四年八月十三日) 大正十四年十二月十一日印刷
第三種郵便物認可 行

(毎月一回十二日發行) 第四卷第十二號